

巻頭言「シンポジウム特集に寄せて」

昨年の第27回日本救急医学会中部地方会学術集会の前日、12月6日（金）夜の福井AOSSAの県民ホールは熱気に包まれていました。学術プログラムとして組まれた能登半島地震関連シンポジウムが、会場内と会場からのLive配信で参加者多数の中開催されていたのです。

座長は私と、福井大学医学部附属病院の大嶋様が務めました。2024年1月1日に発生した能登半島地震では、様々な団体による災害活動や支援が行われていて、この時期は復旧に向けて現在進行形で進んでいる状況でした。このシンポジウムを企画した大会長の福井県立病院救命救急センターの前田先生の言葉を借りると、この企画の目的は「今回の地震災害対応から日本が現在直面していて、さらに今後も進んでいく高齢化社会における災害対応について考えさせられることが多くあり、高齢者に対しての遠隔地搬送が行われたことについて、被災地域内で起きていたこと、遠隔地搬送として受け入れた際の対応などについて意見を交わして、今後の災害対応につなげていける時間としたい。」というものでした。この目的に沿って、4名の演者が壇上に立ちました。珠洲市総合病院の菊谷様は被災地域内の立場から、石川県立中央病院の太田先生は県内で罹災者を受ける立場から、富山県立中央病院の若杉先生は近隣県の富山で被災者でありながら他県から傷病者を受ける立場から、そして名古屋医療センターの坂田様は遠隔地搬送を受け入れた愛知の立場からそれぞれ発表があり、その後総合討論となりました。災害医療の3Tの中で、最も時間がかかりボトルネックになるのが搬送であることは以前から知られたことですが、高齢者の避難、特に高齢者施設からの遠隔地搬送に関しては多くの課題が指摘されました。その中で、高齢者を見ず知らずの遠隔地に連れて行くことがたとえ救命を目的とは言うものの果たして本人や家族にとって幸せなのか、という今回突きつけられた倫理的な命題は大変重たいものでした。この命題の解答はもちろんこのシンポジウムで出たわけではありませんが、その後今年3月に名古屋で開催され私が大会長を務めた第30回日本災害医学会総会・学術集会の議論に内容が引き継がれ、そこで今後の方策等が検討され、活動の総括の大きな柱の一つへ繋がったことは間違ひありません。

今回この有意義な能登半島地震関連シンポジウムの内容に、一部早川先生のドクターヘリの活躍の内容と津田先生の航空搬送の報告も加えて原稿化することになりましたことはとても意義深いことと考え、巻頭言を書かせていただきました。是非それぞれの内容を一つ一つ吟味しながらじっくりお読みいただければ幸いです。

（名古屋掖済会病院 院長 北川 喜己）